

聖ホセマリアの生涯 －51

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理と司祭の欠如でした。

2024/06/14

[過去の記事はこちらから](#)

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理と司祭の欠如でした。セ

ンターの管理の問題は前回見たようになんとか解決の道筋がつきました。

司祭の問題というのは、オプス・デイには司祭が聖ホセマリア以外にいないという問題でした。神父はメンバーたちに霊的指導と養成に精力を注いでいました。しかし、赦しの秘跡は自分で聞かず、各自が好きな司祭に赦しの秘跡を受けるよう勧めていました。それはメンバーが神父に手足を縛られた状態になることを避けるためでした。しかし、やがてその不都合が明らかになり、メンバーの霊的指導とオプス・デイの統治の仕事に当たる司祭は、信徒のメンバーから出ないといけな思考えるようになりました。

ところが、これには法律的な難問がありました。当時の教会法によれば、司祭は自分が働く教区か修道会に属さなければならず、オプス・デ

イはそのどちらでもなかったからです。この問題の解決のため、聖ホセ・マリアは祈り考え、また教会法の専門家に相談しましたが、答えは見つかりませんでした。神が必ず解決してくださると信じ、古参のメンバーの三人を選び、司祭になる気持ちがあることを確かめた上で、彼らに司祭叙階の準備をさせました。その三人とはアルバロ・デル・ポルティエリヨ、ホセ・マリア・エルナンデスとホセ・ルイス・ムスキスで三人とも工学部を卒業し、仕事をしていました。この状況を鑑み、司教の許可を得て、当時マドリードにいた一流の神学や教会法の専門家に頼んで、個別授業をしてもらいました。

1943年2月14日（女子部の創立記念日）、女子のセンターでミサを立てている間に、神は神父に解決法を教えたのです。ミサが終わるとポケットから手帳を取り出し、「聖十字架司祭会」と書き、また小さな円とそ

の中に十字架という図を描きました。

つまり、オプス・デイと結びついた司祭の会を結成し、信徒のメンバーが司祭になれば、そこに帰属し司牧に励むという仕組みです。円と十字架の図は、世界の中に十字架（キリスト）を打ち立てることを意味すると考え、オプス・デイの印章にしました（写真）。神父は、司祭の問題が女子部創立の日に解決したことは、神がオプス・デイの一致の大切さを教えておられるのだと確信しました。

尾崎明夫